

おやすみ

柳川誠介

北風がまた窓を鳴らした。芳和は鉛筆を置くと石油ストーブの炎を調整し立ち上がった。

吹雪になるのだろうか、と窓のカーテンをちよつと明けて外を見ようと思つたが、いつのまにか手はストーブの上にかざされていた。

もう外はだれも歩いていないだろう。ただ一面灰色の世界のなかで板塀が音をきしませながら、大きな松が強風に身もたえするようにして、小さな家々は縮こまるようにして、そう、吹雪の夜は昼間何とも思わなかつた木々や家並みまでが吹雪という宿命に耐えているように感じられてくる。

研究室の前の老いた樫の木はどんなだろうか、バス停のそばのボブラの木は折れないだろうか、そして、下宿の入口にある犬のいない犬小屋も。風はだれかれかまわず冷たく吹きつける。吹雪の止んだ朝、木々の幹に点々と付着した雪は芳和にとつてそれは孤独で悲壮な戦いの跡のように思えた。

「皆苦しいからこそ助け合つて……」と言つていたのはこんな晩ではなかつたろうか、窓から外を見ていたときではなかつたろうか、そう、東京では珍しいほどの大雪が降つて、窓から二人で、……二人で。

東京とはこんなにも離れているのに、あんなにも前のことなのに——机に向かつて追憶が彼の脳裏を駆け巡つていた。本棚に並べてある数式のぎつしり詰まつた昔のノートでさえ過ぎし日を想い起こさせた。

* * *

「じゃ紅茶三つだね」とMはテキパキと店員に注文した。軽快なマーチが流れている。

「どつ、何か音楽会行つた？」

と芳和がたずねるとMはいつもの調子で

「いや、それ位の金あればね、今の紅茶位おごつてやるさ。」と笑つた。

「おや、君はこの間、伊東京子だかのリサイタル聴きに行つたんだつて？」

Mのとなりに座つていた由利子が秘密を知られてしまったように悪戯っぽく笑う。

「いいさ、俺は来年シュワルツコップのリサイタル行くだ、な、そのときは三人で行こうよな」

Mは身を乗りだして言う。

「歌が好きなんだね」

「ロマン派のリートもいいけど、モーツァルト、ほら、シュワルツコップも歌つた『春への憧れ』てやつ、簡素ながらあの澄んだ美しさ、なんとすばらしいのだろう」

由利子がハツと我にかえつたように口をささむ。

「それ、この間聴いたのよ、私も好き」

「あれね、ピアノ協奏曲二七番の三楽章と出だしが同じなんだね」

「そうそう」と由利子。

「そうさ、協奏曲の方はケッヘル五九五で、歌の方はケッヘル五九六なのさ」

とM。

「アラ、そうなの」

と思いがけないことを知つた喜びがわいてきた。同時にあることが頭に浮かんだ。

「ちよつとおもしろいことだと思わないか、ピアノ協奏曲の方は『天国への扉』といわれている。それと『春への憧れ』となにか結びつきを感じないか、文学的に」

「文学的にか、それは俺は考えてもみなかつたよ。けれど、天国とか極楽とか

言うのは洋の東西を問わず春みたいなどころだと人は思っている。

暑くもなく、寒くもなく、無重力で、心理学者は実はその世界は人間の胎内だという」

「やっぱり心理学の奴は気分こわすな、こっちは音楽の話をしているんだぞ」

しかしMは真剣な顔つきで続ける。

「いや、これは神秘的なときさ。死亡とは生まれる前の胎内に戻ること。これは仏教の輪廻の思想とも通じる。そればかりではない、アダムとイヴの追放された楽園こそ、この世界。すなわち、われわれは母体から追放されたんだ」

「ウーム、なるほど、するとわれわれには共通に胎内の記憶があるのかもしれないというわけか。ちょっと神秘的なことだな。確かにアダムとイヴは生まれる前の姿をしている」

「こら、また落ちる話をする」

とMが言つて皆が笑った。ちょうどそのとき、注文した紅茶がやってきた。由利子が立つて茶碗を並べた。そして今の話に興味を持ったらしく、何も言わずそつと席に戻った。芳和は紅茶の湯気で曇ったメガネをハンカチで拭きながら話を続けた。

「ぼくがさっき言いたかったのはね、人生とは冬だと思わないか、ということなんだ。多かれ少なかれだれでも高村光太郎じゃないけど『きつぱりと冬が来た』と何もかも覚悟して四つになって取り組んでいかなければ負けてしまつ、そんなところがあると感じるよ」

「やつぱり…」

と由利子が言いかけて笑った。

「そいつはもつともだ。俺も歳だな。そんな風に考えるようになったとは。子供の頃は人生はいつも春のことく感じていたのに」とM。

「けど、ぼくなんかどうしても夢、なんて言つてよいのかこれも『春への憧れ』みたいなものを描いてさま

よっている。いつか楽になるだろう、期待はしなくても心の底ではいつも何かを『憧れて』いる」

「そうさ、人間で冬の野をさらつて行く旅人のようなものさ」

「おや、どこかできいたような」

「気がつかないのか、冬の旅さ、冬の旅。さすうらうわれら若者は悩み、苦しみ、やがて辻音楽師に出会う。そのうちにこうやつて音楽を楽しむ仲間を作る」

「うん、うん」

「そう、音楽はわれわれを慰め、力づけてくれるのだろうか。さすうらわれら若者は夢と希望をはぐくんだ少年時代に別れをつげ、今人生の冬の旅にでる。ここで第一曲『おやすみ』がはじまる。それFremd bin ich eingezogen,」

「ついに出了か、おいおい、それはまた合宿でアルコール入りでやつてくれよ」

「Fremd zieh ich wieder aus!」

上気したMを中心に三人は快い興奮に酔っていた。さつき喫茶店内に流れていたマーチは静かな弦楽四重奏に変わったが、ほとんど耳に入らなかった。いつの間にか日は西に傾き、由利子の背後の窓から化粧ガラスを通じて淡い光を投げかけていた。由利子は歌うMの隣でちょうど伴奏をするように片手をテーブルの上に出し、指を動かしながらピアノ・パートを小声で歌っていた。目を半ば閉じたうつ向き下限の顔から感じる寂しさは芳和には彼女が郷里から離れて東京に学んでいるからかとも思われた。

「ねえ、君はさつきからお静かだけど、どう思っているの？」

Mは歌うのをやめると急に真面目くさつて由利子にたずねた。

「わたし?でも…」

と由利子は顔をあげると目を動かして照れ臭そうに笑った。

「あのね、わたしの考えている人生や音楽に関することってちょっとMさんたちと違うのよね」

「だから知りたいんだよ」

「わたし女性だし、能力に恵まれてもいないし、だからといって受動的になるのでもないんだけど…わたしの考え方、年寄りじみていると言われるかしら」

と由利子は淡々と話し始めた。

「人生で何か目的を持って生きることとは大切だと思うの。偉大な芸術作品を残すこと、大発明をすること、あるいは大金持ちになることだって、個人個人の生きがいとなり、それを追及して生きて行く人はとても偉いと思うわ。けれど、もしそれが成就しなかったら、そのために生きてきた人にとって何が残るかということね。実際、現実には思い通りに行かないことが思い通りに行くことよりどれほど多いかわからないし、また、確実に成功すると思っても、それまで生きていられなかったらどうなるでしょう。現に、私達だって明日にでも死が訪れるかも知れないわ。そのとき何が残るか、普段は考えてもみないかも知れないけれど」

異常な緊張が突然といってよいほどに三人の間にみなぎった。じつとテーブルの上の一点を見つめながら落ち着いて、むしろ微笑すら浮かべながら語る由利子は一瞬別人のように見えた。背後からの日の光が彼女のオレンジ色のカーディガンの輪郭を浮き上がらせていた。色白の頬がその反射光を受けてかほんのり赤みを帯びてみえた。

この細い肩の、一見か弱くも見える寂しそうな眼をした女性が今から人生の最も深刻な問題にぶつかっていくのだ、と思ったとき、芳和はそこに『けな

げ』なものの上のあるものを感じざるを得なかった。

「さつき『旅』について話したけれど、旅とは目的地に着くためにするのばかりではないと思うの。美しい風物に触れ、未知の世界に心を躍らせ、宿に立ち寄っては暖かい人情に泣き——そのうちに目的地に着くより徒然なるままに体験するいろいろなことが自分の成長にとって、もちろんそればかりではないかも知れないけれど、そういったことが大きな満足を与えるようになるのね。目的地に着くということも大切だね。けれども、旅とは旅立ったときから既にあることを成しているのではないかと思うの。私達がこうやって音楽を楽しんでいるのも、きっと私達があす死んでも幸福な一生を終えられたと思えるように神様がしてくださっているのだと思うわ。モーツァルトは晩年の手紙の中でこういつているの。『近頃はことある度に自分が死ぬときが来たと感じさせられます。今やまさに終わろうとしているのです。私の才能を十分使わないうちに私は死んでしまうのです。それにしても人生は美かったし、私の仕事は幸福な未来の予感に包まれて始まりました』ああ、モーツァルトはそれでもなんと幸福だったのでしょう。美しい音楽、そして愛する妻、愛と美に包まれて一生を終えることができたのですから。愛と美の永遠を信じ、それによって得る心の平安。生きるというのはそんなことではないかしら、とこのごろ感じているんです」

沈黙の後には弦楽四重奏の安らかなアダージョが聞こえてくるだけだった。

* * *

「アラ、おばさまいいわ、わたし、お茶くらいあとでとりにいくわ」

「そうね、きつとおじゃまね」

「やだ、あんまりいわないで」

白いエプロンをした由利子の叔母が笑いながらドアを閉めて出て行った。小柄だが上品な笑い方をする。由利子の下宿は目白にあるアパートだったが、すぐ近くに叔母の家があるので休日や授業の少ない日などはいつもここで過ごした。ピアノがあるのも都合だった。大学の洋楽観賞会、いつの間にか芳和とM、そして学年は一学年下だったけれど由利子が加わってて楽器を持ち寄って合奏するグループができた。

「きょう、Mはレポートが忙しいから来れないって」

「この前から統計の計算はあいつにやってもらえたらいいんだが、なんて言ってたわ」

「おやおや、でもぼくは計算屋じゃないんだからなあ、今度会ったら言つときだよ」

「変曲はするけど、よね」

「そんなに下手くそかな、ぼくは」

芳和にしてみれば年下の女の子にからかわれるのはあまり面白くなかったが、由利子に関しては仕方がなかった。Mにしろ、芳和にしろ、高校時代ちよつと楽器をいじったことがある程度で、大学に入っていくら猛練習したところで、幼いときから環境に恵まれ正規に音楽を学んできた由利子にはかなうはずがなかった。Mのバイオリン、芳和のチェロでピアノトリオをやるとリーダーは結局由利子となってしまうた。

「きょうは伴奏してもらおうと思って来たんだ」

芳和は持って来たチェロをケースから取り出した。楽譜も一緒だ。

「わあ、久しぶりね、前やったのなんか持って来た？」

芳和の隣に由利子が腰掛けた。由利子は楽譜を手にとると小声で歌いながら足でリズムを取った。二人の腰掛けているソファのクッションがそのリズムで揺れた。

「じゃ最初は易しいのからやろつ。ヴィヴァルディのソナタでいいかい？」

「いいわ、ピアノも割と楽よ」

由利子のピアノは正確だった。そして澄んだ響きを持っていた。ピアノだけのメロディのところなど、自分の方はそっこのけで聴き惚れてしまうくらいときもあった。いつか何かの名曲を弾いてくれないかと思うのだけれど、何かと言って逃げてしまふ。芳和にしてみれば、あれだけ弾けるのにもつたいたいと思うのだけれど、彼女にしてみれば合奏が最大の喜びで満足しきっているのかも知れなかった。

「アラ、いまのとこ違うわ」

芳和が振り向くと由利子はチェロパートをピアノで弾いて違った箇所を教え てくれた。バッハの『アダージョ』、シューマンの『トロイメライ』、やや難しくなつてポツパーの『ガボット』、サンサーンスの『白鳥』（もっともこれは由利子にしても難しい所があつていつも中途になるのだが）そしてブルッフの『コル・ニドライ』。

「ねえ、フォーレの『夢のあとに』はまだやらないの？」

バッハの『アリオソ』をやろつとしたとき楽譜の中からフォーレの小品を見つけた彼女はちよつと芳和の方を見上げると言った。

「おや、そんなの持ってたっけ」

「そんなのつて、前からやろつて言つてたじゃなくつて？」

「ごめん、いい曲だからもつとつまくなつてからやろつと思つてゐるから」

「だつてこれ、わたしも大好きなのよ、『コル・ニドライ』弾けるなら、どうして弾いてくたさらないの？」

「でも、八短調で音程難しいんだよ」

「だって…あの…このごろ忙しいの？あまり合奏できないの？」

由利子はちらりと芳和の方を見ると下を向いて楽譜を無意味に撫でていた。きちんと揃えられた形の良い脚が心なしか震えているように見えた。

「ぼくの目標のひとつは、まず大学院に言って数学の研究者となること。数学は人間の理性がこれ以上のものは考えられないくらい美しく結晶したものだ。数の世界はものすごく広くて、うっかりすると溺れてしまいうくらいだと、前にも話したことがあったっけ」

由利子は黙ったままだった。手はきちんとスカートの上に揃えられていた。

「それと、いまバッハの『無伴奏チェロ組曲』を習っているんだ」

その言葉は由利子の耳には入らなかったようだった。

「芳和さん、やっぱり数学科の人は音楽や絵や文学を捨ててもひとりロジックの世界に入っていくの？」

小さな声だった。小刻みに震えているようだった。

「バッハの『無伴奏チェロ組曲』はチェロの名曲のなかでも『旧約聖書』といわれているじゃないか。ぼくのテクニクでは無理だとしても、最高のものをやろうとすること、それが大切なのだと思ってるのさ。数学でも、物理でも、行き着くところは皆宇宙の人間の理性の問題にからんでいるのだから」

由利子は泣いているかのようだったが、そっと立ち上がると窓の方へ歩いていった。その拍子にソファアの上の楽譜が一枚床に落ちた。その音が静かな部屋に異様に響いた。

「目指すところは同じだと思うの」

由利子はカーテンをゆっくり引いた。家がやや高台にあったので、商店街や住宅が遠くまで重なり合っていくのが見渡せた。

「私の育った家もこのようにちょっと高台にあって、いまでもいつも海が見

渡せるの。小さい頃、夏になると父につれられて弟と泳ぎに行ったの。海岸から少し離れたところに小島があつてわたしたち三人、だれが一番速く行けるか競争するのね。まだ子供だから結果はやっぱり歳の順になって、弟は悔しくてしかたないの。だから、島に着くとすぐ『帰りは負けないぞ』と言い張るの。

水を飲んで、肩でやつと息をしているのによせばいいのに泳いで帰るの。でもやっぱりだめで途中でわたしたちの船に乗ってしまったのね。父はいつも眼を細めて弟のことは見ていたわ。『やっぱり男の子だわい』なんて言つて。わたしはそのときはどういふことが分からなかったわ。もちろん、弟は何も憶えていないでしょう。けれど、段々わたし、成長していく弟を見ると、弟が自ら困難にぶつかつていって、その土壇場でどれほどわたしたちの愛と信頼に頼っているかが分かつてきたの。海は渡れなくなつたつて悲しむことはないわ。皆、渡るのには苦しいの。だからこそ助け合つて進むの。その喜びがあるから楽しいのだわ」

言い終わると由利子は少し晴れやかになつたようだった。顔は見えなかったが口調がしつかりしていた。

「わたし、文科だからワイヤーシュトラウスの定理やオイラーの公式なんて知らないわ。でも、わたしの父は医師で、家にはいろんな本が置いてあつて、幼い頃は家へ患者さんが来るのを見るにつけ、『今に自分も本を読んでかわいそうな人たちを治してあげたい』と思つていたの。けれど、わたしはモーツァルトやシューベルトやトルストイなどと一緒に育てられたの。そして、微分方程式はよく分からなくなつて何か別のものを芸術を通じてくみ取れるようになったと、今信じているの」

由利子はそつと前髪を直した。芳和の所からは後ろ姿しか見えなかったが、その仕草はいつも彼女が何かを言い出すときの仕草であることが分かった。

「目ざす所は同じだと思うの」

窓から暮行く街が彼女の肩越しに見えた。

「わたしたちも、昔の人も、これから大人になって行く人も、皆苦しい中をもう少し楽しくならないだろうか、もう少し仲良くできないだろうか、と苦勞しながら生きて行くの。ある人はこんな機械を発明したらよいだろう、ある人はこの薬があつたら何人が生き長らえるだろうか、と。また片方ではそういう冒險に一生を捧げている人のためにソナタや変奏曲や詩を書いているの。そして最後に『大変でしょう、疲れたでしょう』とお皿の上にできたてのお料理を作つて食べさせてあげる人達がいるの。皆、皆、行こうとするところは同じなの。そして、渡つても渡れなくても、皆喜んで静かに次の世代の人達に引き継ぐの。もう少し楽しくならないか、もう少し仲良くできないかと思うとき、皆苦しいの。皆苦しいからこそ助け合つて、渡れても渡れなくても……」

由利子は泣いていた。小さな肩が不規則に上下していた。芳和はそつと部屋を出た。都会特有の赤黒い夕暮れの光が目にしみた。

* * *

風がさらに強くなつてきたようだった。北海道の冬は寒かった。芳和は計算する手を休めると口許へ持つて行つて暖めた。あす雪の中を研究室へ向かうにはもうひとつのコートを出さねば。そして帰りには久しぶりに豆腐を買つて湯豆腐でしようか。

目の前に散乱した計算用紙——ワイヤーシュトラウスの定理、それに関するの途方もない堂々めぐりは今も続いていた。

そんなとき、この夜ふけに、祈るような気持で「おやすみ」と言つてみたくなるのだ。

私は見知らぬこの土地にやってきた。

そして、また見知らぬこの土地を去つて行く。

多くの花にとりかこまれたあの陽春の想い出よ。

乙女は恋を語り、

その母親は婚禮のことを語つた。

今、世界は暗く悲しく

道は雪の中に埋もれてしまっている。

最後に会つたのは学年末試験の三日前だったろうか。

「あなたは強くなりたいと望んでいるのですか」と。

降りはじめた雪が彼女の頬に当たっていた。

私は、旅立ちの

時を選ぶことはできないのだ。

この真つ暗な闇の中でも

道が自ら私にその時を知らせてくれよう。

月の光は、いつも私と共に歩く。

そして私は、白い広野に

獣の足跡をたどつて行こう。

(完)

あとがき

「おやすみ」は一九六八年から翌年にかけて、同人誌のようなものにした作品です。ミユラーの詩に曲をつけたシューベルトの歌曲集「冬の旅」の最初の曲「おやすみ」は次のようにして終わります。

お前が夢から覚めぬよう、

お前の憩いを妨げぬよう、

私の足音をしのばせて

門辺に立つ。

今ここを通りすぎる印として

お前のために、扉に記す、

「おやすみなさい」と！

いつの日か、それがお前の目にとまるとき、

私の想いを知ってくれることだろう。

当時、いろいろなことで「冬の旅」と心情が一体になってしまったばかりは、書いたところでこの詩のように「目にとまる」ことはありそうもなかったけれど、何か残してみたかったです。そんなことを先日「グレル」で遠藤さんにつづかり

しゃべってしまったのが今回の復刻の動機になりました。

復刻にあたり、句読点、漢字の使い方、言い回しに若干の手を入れました。稚拙なことはもとより、やはりばくにはこのようなものを書く資格はなかった、というのが正直な感想です。文中に引用されている「モーツァルトの手紙」はその後偽作であることも判明しましたし、おおっぴらにできるようなものではありません。

しかし、気がつくと「おやすみ」を書くまで二十五五年、書いてから二十五五年経っています。つまり、平均的な人生の時間の三分の二がこれを中心にして経過しました。ばくの場合、最初の二十五年にくらべ、あとの二十五年は幸いにもずっと幸福に送ることができました。しかし、この次の二十五年はどうだろうか、それはだれにもわかりません。ときには、もしかしたら今よりずっと人生について真剣に向き合っていたかも知れないこの作品を書いた頃の気持ちに戻って日々新しい気持ちでやって行きたいと思います。

ご愛読ありがとうございました。

(一九九三年十月二七日)

おやすみ

1993.10.27 復刻
1995.8.30 第2刷
1997.1.31 第3刷
2000.9.17 PDF版

